



Title	「幸福」のこちら側 : Richard PowersのGenerosity に見るExuberanceとResilience
Author(s)	渡辺, 克昭
Citation	大阪大学英米研究. 2015, 39, p. 31-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「幸福」のこちら側

—Richard Powers の *Generosity*

に見る Exuberance と Resilience—

“The time for deciding is after you’re dead.”

Richard Powers, *Generosity*

渡辺 克昭

ポストゲノム時代のオメガ・ポイント

近年、とりわけ生命倫理の領域において、再生医療、遺伝子治療、バイオテクノロジー、脳神経科学などの先端科学技術の利用をめぐって、避けて通れない問題系としてエンハンスメント論争が浮上してきたことは注目に値する。Human Enhancement とは、人工器官など医学的な方法によって治療目的以上に運動能力を増強したり、薬物や遺伝子操作を通じて記憶力や認知能力を高めたりすることがそれにあたる。また、情動耐性や幸福感の現出や共感力の強化といった、人間の主体の根幹に関わることまでもがその射程に入ってくる。日本語では「能力増強」、「増強的介入」とも訳されるこの領域への関心の高まりの背景には、ヒトゲノムの解析、生殖過程の人工操作、iPS細胞、人工知能、ナノテクノロジーなどにおける技術開発が21世紀に入って指数関数的に加速し、実用化が進んだことが挙げられる。かつては専らSFのテーマだった事象が現実のものとなり、パラダイム転換の特異点^{シンギュラリティ}にわれわれは今まさに差し掛かろうとしている。

この分野の急激な進展に伴い、人文科学においても、得られた知見をいか

にフィードバックし、現実に関わりかけていくかが喫緊の課題となっている。建国以来セルフメイド・マンの理想によって幸福を追求してきた合衆国ではこうした志向が強いだけに、強烈な期待と不安が交錯する。生殖、教育、医療、身体を巻き込んだ人類史上類を見ないパラダイム転換点に、アメリカ文学はいかに向き合おうとしているのか。歴史的に見ても、徹底した個人主義を通じて、「幸福の追求」を掲げてきた合衆国では、「より強く、より美しく、より若く、より賢く、より気分よく」という志向はことのほか強い。だがその一方で、遺伝子改良の設計的生命観と、それが後世に及ぼす深刻な影響に対する懸念も根強く残る。生命操作時代の人間増強は、機会均等と自助努力の共和国の美德の終焉を意味するのか、あるいはまた、それこそがアメリカン・プラグマティズムの必然的な到達点なのか。プロメテウスの願望によって理想的なデザイナー・ベビーを育み、リベラル優生学的アメリカン・ドリームを実現することは、「明白なる運命」としてのネオ・アメリカン・アダムの誕生を意味するのか否か、議論の種は尽きない。

このように Human Enhancement は、合衆国の未来志向や例外主義と相まって大きな裾野をもつが、それを自覚するかのように、Leon R. Kass を中心に Bush 政権下の大統領生命倫理評議会が 2003 年に報告書 *Beyond Therapy: Biotechnology and the Pursuit of Happiness* をまとめた。「幸せな魂」のあり方を強調する同報告書は、人間増強が挫折や偶発性を孕んだ人生から人間を切り離し、主体性を危うくさせると警鐘を鳴らしている。同委員会の Michael J. Sandel もまた、*The Case against Perfection: Ethics in the Age of Genetic Engineering* (2007) を著し、贈られたものとしての生への感覚の喪失が、偶然性に満ちた招かれざるものへの寛大さを喪失させ、支配への衝動が抑制できなくなると指摘している。だがこうした志向は、無人爆撃機や兵士の超人化など軍事の領域にも及び、世界に先駆けて多分野で不可逆的な進化の道を模索する合衆国のジレンマは限界点に達した観がある。

そうした趨勢を踏まえ、現代アメリカ作家 Richard Powers と Don DeLillo の最近の作品を比較してみると、ある種の共通意識を探り出すことができ

る。奇しくもその接点をなすのが、地質学、古生物学に通じた神父 Teilhard de Chardin の進化論、オメガ・ポイント理論である。イラク戦争の元軍事顧問を主人公とする DeLillo の *Point Omega* (2010) は、表題通り、Teilhard の唱える進化した人類の叡知の究極点オメガ・ポイントを反転し、それを終末論的な惑星規模のマクロ的時間相において捉え直した問題作である。その前年に発表された Powers の *Generosity* (2009) の副題はまさに *An Enhancement* だが、遺伝子学者によって幸福の遺伝子をもつと臆断された若き留学生の卵子をめぐるバイオ産業とメディアの狂態をメタフィクショナルに描き出したこの小説においても、Teilhard やオメガ・ポイントへの言及が見られる¹⁾。

二人の現代アメリカ作家のこのような人類の進化のパラダイム転換点、オメガ・ポイントへの関心に微妙な影を落としているのが、いわゆる「2045年問題」、すなわち Ray Kurzweil が *The Singularity is Near: When Humans Transcend Biology* (2005) において唱えた「技術的特異点^{シンギュラリティ}」をめぐる問題系である。コンピュータの集積回路の集積度が一年ないし二年で倍増するというムーアの法則を拡張し、「収穫加速の法則」により、バイオテクノロジー、ナノテクノロジー、人工知能など、諸技術が指数関数的に発展を遂げた結果、コンピュータ技術が爆発的に進出し、21世紀半ばまでに「技術的特異点^{シンギュラリティ}」に到達するという。その時点で全人類の知能をも凌駕するコンピュータは、人類の知性や存在の有りようにパラダイム転換をもたらし、コンピュータ知能と融合した超知性を備えた超人類が誕生することになる。2014年に封切られた Wally Pfister 監督、Johnny Depp 主演の映画 *Transcendence* はまさにこのようなテーマを正面から扱っているが、Kurzweil によれば、「特異点とは、われわれの生物としての思考と存在が、自ら作りだしたテクノロジーと融合する臨界点であり、その世界は、依然として人間的ではあっても生物としての基盤を超越している」(Kurzweil 9)。来るべき人類の分岐点に対するこの考え方の根底には、「人間という種は、生まれながらにして、物理的および精神的な力が及ぶ範囲を、その時々を超えて広げようと

するものだ」(Kurzweil 9) という認識が窺える。

だが、「死という宿命も思うままに操れる」(Kurzweil 9) こうした人類の分岐点が現実のものとして射程に入ってきたとき、「幸福の追求」を権利として追求してきたアメリカ的想像力はどのような反応を見せるのだろうか。また、それに対して作家たちはいかなるクリティークを示すのだろうか。Powers が *Three Farmers on Their Way to Dance* (1985) において Charles Péguy を引き合いに出して言及しているように、システムの変化が極限の「終端速度」なる「引き金点」に達すると、それが自らにフィードバックし、「システムが変化する能力自体が変化する」(*Three Farmers* 81) ことにより、「超進歩はやがて、静止と化す」(*Three Farmers* 83) という見立ても有りうる。あるいはまた、*Point Omega* の主人公 Elster が言うように、やがて到来するオメガ・ポイントにおいて、人類の「自己破壊の遺伝子」(*Point Omega* 52) が発現し、人類が「存在から完全に脱却し」(*Point Omega* 73)、無機質な「石」へと先祖帰りする可能性も否定できない²。「技術的特異点」^{シンギュラリティ}が、オメガ・ポイントと共振しつつも、もう一つの特異点としてのポイント・オメガ^{シンギュラリティ}へと反転する契機となり得る所以でもある。

本稿は、Richard Powers の *Generosity* に焦点を絞り、ポストゲノム時代の³オメガ・ポイントにおいて、「幸福の追求」の神話がいかに追求され、また脱構築されていくのか、惑星思考の枠組みも視野に入れ、考察を進めていきたい。その過程で、なぜこの作品がメタフィクション仕立てでなければならないのか、その必然性を解き明かしていきたい。

幸せの難民、Miss Generosity

本作 *Generosity* のタイトルの由来となった女性の名は Thassadit Amzwar。主人公 Russell Stone が、幸運にもメスカーキ大学の創作学科の非常勤講師の職を得て、教室で出会うことになるこの留学生は、まさに幸せの権化というべき存在で、「彼女に会った人間は一人残らず、昔馴染みの友達同然」

(73) になってしまう。そして、彼女の全身から滲み出る幸福のオーラはたちどころにクラスに「感染」(85) し、Russell までもが Miss Generosity と渾名されるこの学生の快活さに限りなく魅了されていく。だが、Russell が日記に記した「彼女はこの世で最も幸せな難民だ」(12) という言葉が端的に示すように、彼女が醸し出す類稀な生の横溢感は、一世紀半続いた植民地支配ののち半世紀にも及ぶ内戦によって人口の三分の一を失い、荒廃した彼女の故郷アルジェリアというトポスを抜きにしては語れない。母語タマジグ語を奪われ、暴力と汚職と大虐殺に彩られた悲惨極まりないポストコロニアル的試練は、Thassa の家族にも及び、彼女が書いた作文によれば、大学で教鞭をとっていたりべラルな父は暗殺され、その後母も失意のうちに癌で亡くなったという。「気前よく」殺人が繰り返される不幸極まりのない祖国での体験が、逆説的に現在の彼女の幸福感を裏打ちしているとも言えるわけだが、「幸福な少女が世界中の不幸を潜り抜け、いつまでも幸せにいる」(37) という、Russell の想定するいささかお手軽なプロットには収まりきらない包容力が彼女には備わっている。

と言うのも、Thassa は、筆舌に尽くし難い暗黒の歴史に呪われた故国に決して背を向けることなく、生命の息吹が溢れるアルジェリアを「わが家」^{chez nous}と呼び、帰郷を果たした暁には、故郷カピリアのこの上なく美しい山並みを映画撮影することを何よりも望んでいるからである。であればこそ彼女は、「あなたの故郷で生まれ育つのは絶対に嫌だと人に思わせる文章を書きなさい」(27) という Russell の課題において、彼女は家族をめぐる陰惨な歴史を語り終えたのち、次のような懐の深い言葉で作文を締め括っている。「とは言いながら、あそこはとても美しい。できれば皆さんに真近に港から見てもらいたい。きっと誰もが心を満たされるだろう。生命が漲る町。わが家」^{chez nous}(30)。

内戦で両親を失い、離散家族の憂き目を見たにも関わらず、彼女が朗読する作文には不思議な躍動感と、詩情と、のびやかな自信とでもいうべきものが溢れ、「アルジェリアは再び、地中海にそびえる角砂糖の山となる」(32)。

Russell が感じ取ったように、確かにそこからは、あの国で「青春期を生き延びたことへの驚異の念が漲り」(32)、「今後人生がどんなシナリオをもたらそうともそれを受け止める覚悟ができている」(32) ことが窺える。こうした彼女の心情は、のちにマスコミの寵児となった彼女がインタビューで答えた次の言葉、「生きている者は誰しも、生まれていない者より百万倍運がよく、断トツに有利なんだから大いに満足すべきじゃないでしょうか」(204) という、小気味のいい言葉にも繋がっていく。

“Hyperthymia” という名の病一標的としての Thassa

ところが Russell は、暴力が蔓延る故国から「恍惚として神秘家さながら光り輝いて姿を現した」(35) 彼女を、ありのままに受け止めることができない。植民地化された暗黒の精神的風土から奇跡のように蘇り、嬉々として「ディズニーランドから帰ってきたみたいに笑い声を上げて」(35)、周囲を和ませ続ける Thassa は、彼にとって永遠の謎である。幸福論など読む必要もない彼女は、Russell にとって「完全に思いもよらない存在であり、何であれ興味的にして格好の餌食」(46) であるように見えたのである。Thassa が、「いかなる慢性的なウイルス性多幸症」(36) に陥っているにせよ、まさに「^{まれびと}稀人来る」を地で行く彼女に興味をそそられた彼は、Thassa の祖国アルジェリアについてにわか勉強を始めるとともに、あまたの幸福論を紐解き、彼女の幸せの源泉を突き止めようとする。だが彼は、いずれの既成の幸福論からも矛盾した月並みな言説しか引き出すことができない。「幸福な人々は他の人が知らないことを何か知っているに違いない。簡単には手に入らず、ほとんど手の届かない、不可解な、生きる秘訣」(75) のようなもの。これこそ彼がこの留学生から引き出そうと試みたものに他ならない。Thassa が合衆国で目にするものがすべて目新しい移民であってみれば、彼女が「特段どうということもないことに喜びを見出して構わないという気もする」(114) 一方で、Russell は、彼女から溢れ出る至福感の正体を何とかして突

き止め、それを範疇化し、言説化しようと努める。

彼女から、「先生は私が幸せ過ぎると思っているじゃないですか？みんな、私があまりにも幸せそうだと思ってるみたいなんです。ここってアメリカですよ。何々過ぎるってことがない国じゃありません？」(78)と、冗談めかして言われても、Russell は、合衆国が追求すべき幸福が、「常に既に」眼前の難民の中に過剰に具現しているという事実をいかに受けて止めてよいのか途方に暮れる。そこで彼は、「PTSD のせいで彼女は広範な感覚麻痺を引き起こしているのか」、あるいは「あの茫漠とした恍惚は来るべき崩壊の予兆なのかもしれない」(66)とさえ思うようになる。このように、過剰な彼女の高揚感の向こうには必ず精神的な崩壊が待ち構えていると危惧する Russell は、*The Better Without the Bitter?* という幸福マニュアル本の補足欄から、「感情高揚性気質^{ハイパーサイミア}」という用語をついに探り当てる。

彼が貼ったこのレッテルにより、Thassa の運命はのちに大きな渦へと巻き込まれていくことになるが、Russell はさらなる確証を求めて、非常勤先の大学の女性カウンセラーのもとを訪れる。彼は、臨床心理学者の Candace Weld に自分の学生が「常軌を逸しているほど過度に幸福なのではないか心配だ」(72)と打ち明ける。はじめは、「アルジェリア難民が幸福だといけませんか」と軽くいなされるものの、二人はやがて Thassa のことを愛おしく思い、気に掛けるようになる。こうして徐々に Thassa の信頼を得た二人は、この留学生の無二の親友となっていく。のみならず彼らもまた、さながら愛のキュービッド、Thassa の矢に射られたかのように、次第に親密な間柄になっていく。

メタフィクショナル・ジェネティック・デザイン

このように Russell は、Thassa から個人的に恩恵を被る一方で、彼女が、「幸福をめぐる遺伝のルーレットで大勝した者」(67)なればこそ、常に羨望の眼差しの的となり、何かにつけ「格好の餌食」(46)となることにも気付

いている。こうしたアイロニーと絡んで浮上してくるのが、この小説のメタフィクショナル・デザインである。作者が、プロットに周到に書き込んだはずの作中人物によって出し抜かれ、そのことによってプロットが制御不能になるといったお馴染みの仕掛けが、この小説にも見られる。ここで注目したのは、そうした「書き込み」を脱構築するこの物語構造自体が、人間にア prioriに「書き込み」を施す遺伝子が主体と織りなす危うい関係のメタファーとして機能していることである。この背景には、人類がそれ自体、長い進化の時間相における一つの位相に過ぎず、アガンベンの言う「剥き出しの生」としてのゾーエでありながら、自らに神のごとく介入し、操作するビオスでもあるという事実がある。メタフィクショナルなテキストは、このように遺伝子を「操作する者／される者」の間に生じる摩擦を、作者のデザインと作中人物のデザインの間に生じる軋轢として描出するのにまさに適している。

Generosity においてそのようなメタフィクショナル・デザインは、次のような二つの次元で設定されている。まずは、成り損ないの三文作家としての Russell が、自らの作中人物であるかのように Thassa を措定し、彼女を操作したり保護したりしようとする次元。彼にとって Thassa はまさに、「自分がかつて書くのを夢見た物語から飛び出してきたような女性」(33) に他ならず、Thassa の “Exuberance” を追求しようとする彼は、図らずもそれを脅かすプロットのスイッチを押してしまう。その一方で彼は、Thassa をそうした脅威から護ろうと奮闘する。もう一つの次元は、幸福の遺伝子の保持者と噂されることによって騒動に巻き込まれる Thassa と、それを不安そうに見守る Russell や Candace をさらに外側から見守り、論評を施すべく時折テキストの顔を覗かせる「私」が語る次元である。

前者において Russell は、あたかも物語作者であるかのように、Thassa に身に降りかかる災厄を察知し、彼女がクラスメートの John によってレイプ未遂事件の被害者となることを見越している。「Russell は既に被害者が誰か知っている。犯罪を耳にする以前から彼は知っていた。ミス・ジェネロシテ

イーだ。合衆国でレイプされるために、アルジェリアでの傷害を逃れてきた女。彼はカルビ人を目にとめた瞬間から、誰かによって襲われる定めだとを知っていた」(105)。「皆に侵略されてかわいそうなアルジェリア」(161)よりしく、Thassa が凌辱の危機に瀕する運命にあったことは、Russell にとって自明のことであった。と言うのも「Thassa の喜びに何かの意味があると考え、そんなプロットには何らかの結末があり、何らかの事件が起こらないといけなかったのは彼自身の責任なのだ」(87) から。メタフィクショナルなこの述懐に対して、「私」もまた、それに続く一文で「彼の気持ちが手に取るようにわかる」(87) と、それにお墨付きを与えている。

このように起こるべくして起こったレイプ未遂事件で、Thassa は持ち前の包容力を発揮して逆に John を諭し、恥じ入った彼は「胎児のように体を丸め込んで、胎児に戻ろうとするかのように呻く」(104)。だが、Thassa がこの事件で一躍有名になったのは、そのような彼女の稀有な資質について、Russell が「感情高揚性気質」^{ハイパーサイミア}の可能性があると、事情聴取にやってきた警官に漏らしたからに他ならない。この情報はたちどころにマスコミを通じて増幅され、類稀な幸福の遺伝子の持ち主として Thassadit Amzwar は「創作ノンフィクションの商品へと変貌する」(110)。これまで、Frederick P. Harmon の *Make Your Writing Come Alive* といういささか陳腐な教本を用いて、授業で学生たちに作文の指導してきた Russell は、この時点で彼自身の発言が引き起こした意外な事態の進展に当惑し、メタフィクショナルな作中人物、Thassa をマニュアル通りにコントロールする術を失ったに等しい。「書くことは常に書き直すことだ」(34) という、彼がかつて学生に語った哲学的な言葉が、アイロニックなかたちで彼自身に戻ってきたわけである。「第一章に遡った時点で、本の結末までに彼女が最終的に科学の手によって捕まることを予測していた」(166) Russell ではあるが、その悲劇のプロットの詳細について、彼は未だ知る由もない。

「幸福／ゲノムの追求」－博士の愛した遺伝子

かくして彼女は Russell の手を離れ、幸福の遺伝子の持ち主という「創作ノンフィクション」に主人公として否応なく書き込まれ、執拗極まりない詮索の標的となる。人類の未来に根源的なパラダイム転換をもたらす貴重なゲノム情報の保有者として、今や Miss Generosity は、もはや一介の留学生ではなく、“Jen” というコード・ネームをもつメシア的セレブへと一夜にして祭り上げられる。まさに彼女の居所を突き止め、そのゲノムを解析することによって、人類の「幸福の追求」が懸っているのである。利権と思惑が渦巻くそのようなホットな標的として、彼女にこの上なく熱い眼差しを注ぐのは、ゲノム学者にして遺伝子関連ベンチャー企業、トゥルーサイト社を率いる Thomas Kurton である。「差し迫った絶滅か、大躍進の萌芽のいずれか」(201) を人類に迫る「もう一つの特異点」^{シンギュラリティ} は、Kurton にとってはまさに後者の意味において、千載一遇のビジネス・チャンスだったのである。「この世の始まりがどのようなものであろうと、その終わりは栄光と至福に満ちたものとなるだろう。想像を絶する未来…」(136)。かく予言する彼は、「幸福が化学的なものだと思いつけてきた」(40) のみならず、まさに「ミスター・オメガ・ポイント」(135) として、「人類の終着点」(165) がほどなく訪れることを待ちわびている。

このようにオメガ・ポイントを意識しつつ、Kurton は、「私たちは 600 年前には洞窟の壁を引っ掻いていた。今ではゲノムの配列を変えている。30 億年の偶然が、今や本当に有意義なものになろうとしている」(252, 257) と、確信に満ちた声で語る。この言葉は、ポピュラー科学娯楽番組『^{オーバー・ザ・リミット} 限界を超えて』^{ジュー}の特集「魔神とゲノム」において彼を取り上げた人気女性司会者、Tonia Schiff とのインタビューにおいて、繰り返し引用されることになる。Kurton の認識するところでは、「人類の終着点」(165) において「ホモ・サピエンスは既にイーロイとモーロックとは言わないまでも、

デミゴッド半神半人と持たざる者たちに二分されている」(165)という。彼によれば、「生物学的な読み書き能力」(175)を駆使して、人類は偶然与えられた限界を超えて、「まだ自分の人生の作者になれる」(60)のである。

このことについて Kurton は、東大で開催された会議「老化の未来」において、次のように雄弁を揮う。「私たちは欠陥のある設計に囚われ、下手な筋書きに付き合わされています。私たちは何か違うものになりたい。物語が始まってからというもの、人類はずっとそう思い続けています。そして今やそれが手に入るようになったのです」(60)。もしそうだとすれば、「人類の歴史を偏見の罫から解放し、人格を超えた空間に解き放つ」(230)ことが可能になり、「あらゆる先天的な病から自由な人類」(176)が誕生する。そのような意味において、「彼の研究の目的は専ら、損なわれた健康を取り戻し、身体の気まぐれから人間を解放し、受け継がれてきた運命の牢獄に風穴を開けること」(228)に他ならない。

まさに Human Enhancement のマニフェストとも言うべきこの立場に立てば、人類は「服用者のゲノムに合せて作られたテーラーメイドの医薬品、遺伝的に個人向けに処方された高性能弾丸」(178)によって、肉体的に多種多様な病や老いや障害を克服できるのみならず、精神的にも幸福感を常に覚えることによって有意義な人生が送れることになる。Kurton は、「包容力の遺伝子型が人類に広まり、われわれに驚くべき技能を与えてくれるのにどれほど時間がかかるか」(197)と、一刻も早いその実現を願うとともに、「幸福の遺伝子は今後何世代にもわたって共同市場に出回ることになるだろう」(194)と予測する。であればこそ「彼は、ポストゲノム時代の新しい^{フィクション}虚構を自分の目で見るまで生きていたいと思う」(230)。そのような^{フィクション}虚構、すなわち「創作ノンフィクション」の実現という意味において、Miss Generosity がもつとされる“Exuberance”のゲノムは、まさに博士の愛した遺伝子だったのである。

こうした「遺伝子仕掛けの幸福」をめぐる世間の熱い眼差しに対して、Thassa が決して臆することなく、協力的な態度を取るところにも、彼女の

包容力が遺憾なく発揮されている。彼女は殺到するメールにも律儀に返信し、Kurton に会って、求められるままに卵子を提供する約束も果たす。こうした無防備な振る舞いにより、彼女は時の人としてますます世間の耳目を集めると同時に、自らの神話化を図らずも助長し、さらなる窮地に自分を追い込んでいく。では、このオクシモロニックな「欠陥とも言えるほどの包容力」(79)は、いったい何に由来するのだろうか。彼女が Russell に語ってみせたように、彼女の名前“Thassadit”は「肝」という意味であり、タマジグ語の「肝」は「心臓」に相当するという(78)。このように生命の根幹をなす彼女が体現する「欲び、拡がり、おおらかな気持ち」(78)に関して、「私」は、“Generosity”という語の系譜をたどり、巨大なラテン語“gens”に由来するこの言葉が、いかに旺盛な生命力を宿しているかを語ってみせる。それによると、生成、生殖、連繫、血統、種、土着、気質、才能など、多種多様な要素と融通無碍に繋がる“Generosity”には、「欠陥とも言えるほどの包容力があり、親子鑑定をするには子孫が拡がりすぎている」(79)という⁴。

このような genealogy から窺えるのは、単純に一つの要素に還元できない“gens”の複雑な意味の拡がりこそが、遺伝子のネットワークにも似た小宇宙を作っているということである。それを踏まえつつ、今度は遺伝子“gene”の方から、このラテン語“gens”を逆照射すると、別のラテン語“Ex uberare”が浮上する。「私」の説くところによれば、「この遺伝子のネットワークの様々な組み合わせが相互に関連して、満足や、欲喜や—よりましな表現がないのでこう呼ぶより他ないのだが—^{エグジュベランス}横 溢と結びつく。ラテン語でいうところの Ex uberare、果実が溢れだすこと」(122)。このような視座から Kurton の営みを位置づけてみると、彼の使命は、彼が Schiff に語ってみせたように、欠陥を伴う偶発的な自然に無為に身を委ねるのではなく、溢れんばかりの Thassa の“Exuberance”を通して、「自然を自らの手中に収め、より素晴らしい天使を彫り出してみせる」(164) ことにあったのである。

オーバー・ザ・リミット
『限界を超えて』ーゲノムとメディアのインターフェイス

ここで注目したいのは、このように標的にされた Thassa の包容力が無尽蔵であればこそ、幸福の遺伝子の商品化のために、市場によって搾取されてしまうという逆説である。彼女の卵子をめぐる一連の騒動は、まさに“Jen”の悲劇というべきものだが、それが限界を超えて制御不可能になるのは、彼女がテレビやインターネット上でカルト的にカリスマ化され、メディア・サーカスに翻弄されるようになってからである。高視聴率を誇る科学娯楽番組『オーバー・ザ・リミット 限界を超えて』シリーズの司会者、Tonia Schiff は、ゲノムをめぐるメディアの熱い眼差しを誰よりも巧みに操作する現代の巫女と言ってもよいだろう。まずもって彼女は、遺伝子操作の魔術師とも言うべき Kurton をスペクタクル化し、メディアを通して彼の科学言説をもっともらしく大衆に流布するエージェントとして登場する。

Kurton と共犯関係を結び、「アメリカで最も場違いな科学テレビジャーナリスト」(98)として視聴者に愛される Schiff は、視聴率のためには派手な演出を行い、大衆に迎合することも厭わない。何よりも彼女は、近未来の科学という「新しい玩具を手に入れたみんなの新しい玩具」(62)なのである。「誰にも劣らぬイスラム嫌い」(81)であり、「番組の視聴者の78パーセントと同じく、自ら遺伝子強化を図る覚悟ができている」(99)彼女に微かな揺らぎと変化が生じるのは、“Jen”にインタビューを行うべく、北西アフリカへと向かったときのことである。「かつて彼女は、人類が自らの運命を手中に収めるのは時間の問題だと考えていた。今の彼女は、避けられないのは過去だけだと知っている。理性はいつなんどきでも崩壊しうる」(81)。このようにチュニスに向かう機上で Schiff は、過去の自分の映像を見直し、生命の未来について当時の自分がどのように感じていたかを振り返る。

アルジェリアで自前の映画製作を夢見る Thassa にとって、現に映像制作の現場に身を置く Schiff は憧れの存在でもあり(223)、彼女と Thassa の間

には同好の女性同士の絆のようなものが確かに存在する。だがそのような親和関係において、影響を受けるのは Thassa ではなく、むしろ Schiff の方である。Thassa という標的、すなわち「幸福／ゲノムの追求」の過程において彼女は、これまで自分が行ってきた行為に批判的な眼差しを向け、それを自らにフィードバックさせることになる。その結果彼女は、編集された Thassa とのインタビュー映像に自己嫌悪を覚え、次のような認識をもつに至る。「遺伝子に合わせて作られた幸福の薬についての様々な予想は、撮影中も今も、Tonia には何の根拠もないように思われた」(256)。都合よく物語化され、パッケージ化され、消費されてきた『^{オーバー・ザ・リミット}限界を超えて』という番組自体が、まさに「^{オーバー・ザ・リミット}受容可能な科学娯楽の限界を超えている」ことに、ようやく彼女自身も気づいたわけである。

このことは、制作現場における Schiff の「反乱」(258)へと繋がるが、彼女の番組への出演と並んで、Thassa のゲノムとメディアのインターフェイスを示すもう一つの重大なエピソードとして、『オーナ・ショー』への彼女の出演に言及しておく必要がある。というのも、『オプラ・ウィンフリー・ショー』を彷彿とさせるこのトークショーにおいて、Thassa は言わば想定外の「反乱」を起こしたに等しく、「生放送でジャンヌ・ダルクへと変貌」(231)するからである。「この二十年間で最もテレビに映った人間」(210)としてこの番組を取り仕切り、「宗教的とも思える意思の力を日々発揮すれば、誰であれ、どんな運命からも逃れられると常に主張してきた」(210) Oona にしてみれば、「先天的な幸福の発見…先天的な気性、それこそボスが断じて許容できない運命論なのである」(211)。

希望と懐疑が入り混じったこのスペクタクルを見守るべく、Schiff や Russell や Candace がスタジオに詰めかける中、この「アイコン的司会者」(221)が発する直截な問いかけに対して、Thassa は苛立ち、およそ幸福の遺伝子の持ち主らしからぬ陰のある応対をした挙句、「怒りよりも濃密な感情に移行する」(222)。事の発端は、「ご両親は幸せでしたかという」という質問に対して、アルジェリアでの不幸な出来事に触れたのち、「アメリカ人

の皆さんはどれだけ幸せなのですか」(221)と Thassa が反問したことから始まる。この発言によって場の雰囲気が一気に刺々しくなり、「じゃあ、もしあなたが他の皆さんと同じように不幸せなら、どうしてこの番組に出演するのですか」(221)という、Oona の辛辣な反撃を招いてしまう。

この一撃によって、Thassa はカメラの前で、誰かに魂を振じられたかのように悲痛に暮れるが、それも束の間、「何か大きなものが苛立ちを乗っ取り、二十三の染色体から育まれるすべてのものに対する抑えきれない感情」(222)が彼女から一気に噴出する。この緊迫感溢れるシーンは、デジタル・クリップが瞬く間にネットに流出するやいなや、「爆発的感染」(222)を引き起こし、世界中で消費されることになる。「そこかしこでティーンエイジャーの女の子たちが模倣しようとしたそのオーラ」(222)は、動画投稿サイトでパーフォーマティヴに反復的に再演されるが、彼女の反応それ自体は、決してその場しのぎの取り繕いでもなければ、捨て身の反論でもなく、次の描写が示すように、彼女の深淵から自然と湧き起こった洞察に裏打ちされている。「この世のものとは思えない独白の輝きは、Thassa Amzwar の言葉から生まれ出たというよりもむしろ、彼女の気構えから、本人の思いとは裏腹に自然に溢れ出す静かな知識から生じていた」(222)。

Thassa の口をついて出てきた含蓄のある言葉、すなわち「皆、本当は死んでいるのが当たり前」、「一分でも[生きているのは]、身に余る光栄」、「無から生じる奇跡」(222)といった言葉は、皮肉にも動画サイトのパーフォーマーたちの軽薄な物真似を通じて、ギリシャ悲劇のコーラスのように世界中に広がっていく。「世界中の Thassadit Amzwar が、耳を傾けてくれる人に声を揃えて請け合う。『もっと良くなる必要などありません。私たちは既に私たちなんです。そして既にあるものは全部、私たちのものなんです』」(222)。幸福のありようめぐらした Thassa のご託宣は、彼女のアルジェリア体験があればこそ生じたものであり、「幸福の追求」に取り憑かれたアメリカ的幸福観の対極をなすものであることは明らかである。だからこそ、こうした「人間どもの市場を振り切ろうとする天使の苛立ち」(335)は、反

アメリカニズム、反後期資本主義、ひいては反グローバリズムの格好のスペクタクルとして、ネット上でグローバルに消費されたのである。

しかしながら、こうした Thassa の神託めいた言説までもを貪欲に取り込んでしまう市場は、彼女の遺伝子が競売に賭けられ、卵子に高額の値段が付けられるに及んで、狂乱の度合いを増していく。あらゆるオファーを拒むことなく、甘受する彼女の運命が暗転するのは、「幸福の女が卵子を 32,000 ドルで売る契約に同意した」(249) という噂がネット上に広まったときである。Kurton の意向を受けてトゥルーサイト社は、すぐさまゲノム情報の特許侵害で買い手の不妊治療クリニックに訴訟を起こす。Thassa はと言えば、市場の論理とは言え、あまりにも法外な対価を得たという理由で、一斉にパッシングを受け始め、姿をくらまさざるを得なくなる。これまで彼女を“Jen”として崇めていた熱狂的な崇拝者までもが離反し、一転して「不吉な存在」^{パーリア}、「除け者」(250)として蔑まれた彼女は、再び時の人として魔女狩りの対象となる。

やがて、「にこにこアラブ娘を殺せドットコム」(251)なるサイトやその模倣サイトが次々に立ち上がるに至って、身の危険を感じた彼女は、クラスメートの隠れ家にてタマジグ語で書かれたお気に入りの詩集を詠唱して日々を過ごすことになる。Harmon の教科書を寝物語に読み返す Thassa は、「創造的な語り手がどんなふうにして彼女をノンフィクションから救い出してくれるのか」(254)と思いを巡らし日々眠りに就く。そうこうするうちに、ホルモン注射の副作用で彼女が情緒不安定に陥っているという噂が Russell と Candace の耳に入り始める。それを裏付けるかのように、今や「不幸の追求」というシナリオに絡め取られた Thassa から彼に「私をうちに連れて帰ってもらえませんか」(266)と SOS を求める電話が入る。「この国で暮らす生まれつき幸福な人は、初めて天然痘に罹った新大陸の先住民みたいに抗体がない」(265)と、彼女のことを不憫に思った Russell は、「創造的な語り手」よろしく、レンタカーで救援に向かう。さして珍しくもない陳腐な恋愛物語をまさに地で行く、お忍びのカナダへの逃避行の始まりである。

“*Chez nous*” — 帰郷の神話学

この旅の過程で、三文文士として初めて文学的エピファニーを得た彼は、これまで自分が「プロットの重圧に押しつぶされていた」(273)ことに気付く。彼女を弄ぶプロットの重圧を今回ばかりは跳ね除け、身を賭して Thassa の逃走を幫助しようとする彼は、この逃避行を通じて、転落の一途を辿る等身大の彼女の姿に触れ、「ひょっとすると彼女は感情高揚性気質では全くないのではないか」(284)と疑うに至る。この疑念はさらに、彼女は「本当は、どれほど幸せなのか」、「彼女の幸福の大半は偽りだったかもしれない」(282)というさらなる疑念を呼び起こす。そして結局のところ、虚脱状態に陥った彼女は、「未来と卵胞刺激ホルモン注射によって打ち負かされた」(284)ごく普通の女性に過ぎなかったのではないかとさえ、彼には思えてくる。

そのような思いが脳裏を過ったときに、「何かが、彼の体を内側から持ち上げ、至福感が」(284)思いもかけず彼に到来する。モーターで過呼吸に陥り、倒れ込んだ彼女を抱き抱える Russell は、「彼女を抱き締めるのは帰郷に似ている。魂の生まれ故郷に戻る感覚」(284)に似ていると、奈落に突き落とされた Thassa との東の間の危うい幸福感に浸る。ここで初めて彼は、「飢えた者たちに追い回され、絶望した者たちに掴みかかれ、科学者たちの手で還元され、マスコミによって解剖され、宗教じみた連中に石もて追われ、起業家どもに値札を付けられ、失望した者どもによって糾弾されたあの輝き」(279)が、「魂の生まれ故郷に戻る感覚」とどこか通じるものがあることを実感する。

だが、その直後に Candace と連絡を取った彼は、自分自身までもが「あの娘のせいで世間に引きずり出される」(280)破目になったことに気付く。彼は、マスコミによって「リンドバーグの愛児誘拐事件以来の有名な誘拐犯」(286)に仕立て上げられ、「指名手配よろしく『ヘッドライン・ニュー

ス』で、これが本当の「幸福の追求」なんて具合に茶化されている」(287)と聞かされる。隠密裏に Thassa と行動を共にする彼は、もはや彼女と一蓮托生であり、メディアの次なる格好の標的になったのである。Candace との通話を終えて部屋に戻ってきた Russell は、その見出しをテレビで目にした Thassa が、精神安定剤や鎮静剤を大量服用し、意識不明の重体に陥っていることを発見する。穏やかに至福の表情を浮かべてモーターのベッドに横たわる彼女の姿になすすべもなく、進退窮まった Russell は、救急隊の出動を要請する。

かくしてこのメタフィクションにおいて Russell は役目を終えて舞台の袖へと退き、物語のクライマックスは、Thassa の故郷アルジェリアを望む国境の町での彼女と Schiff の再会の場面へと持ち越される。「ここでは正気だから、この国では」(291)。かく言う Thassa の素顔の映像を何としても撮りたい Schiff は、Thassa の歓心を買おうと、彼女の卵子の人工授精によって生まれた子供たちのビデオ映像と、彼女の愛読書であるタマジグ語の詩集と、彼女の書き込みが施された Harmon の教本をもって取材を試みる。この場面において「芸術のみが発する類の光」(292)に包まれた Thassa は、まさに彼女の故郷、すなわち「わが家」^{chez nous}(291)として Schiff の前に現前し、遠来の客を歓待する。「ここはアルジェリア。どん底かと思ったら、まだ下に掘り進んでいる。そんな国」(291)と自嘲しつつも、意気軒昂な「彼女の中で、後半生か来世の前半生で、またいつか以前のような横溢が顔を覗かせようと待ち構えているのを、Schiff は感じる」(291)。来るべき「『選ばれた子供』の時代」(292)に照準を合わせた映画製作の話をもちかける彼女に対して、その申し出を寛大に受け入れたうえで、Thassa は次のように言い放つ。「映画を作って、すべてを伝えてくださいな。この場所にまざる治癒力は私の遺伝子にはなかったと」(294)。この言葉が示すようにまさに「わが家」^{chez nous}、^{マグリブ}北西アフリカの地霊と化した彼女は、故郷において、幸福の遺伝子の神話を脱構築する Exuberant にして Resilient な「亡霊」^{アバリッション}(294)へと変貌を遂げる。

黄昏のアトラス山脈

Thassa 救出の試みにおいて Russell が最後の燐光を放って物語の闇へと退場したように、Schiff もまた、Thassa が故郷にて鮮烈に蘇ったこの場面からフェイドアウトし、それと入れ替わりに姿を現した「私」が、初めて彼女と向き合うことになる。Russell をはじめ、作中人物たちを操作してきた「私」は、この娘が幾多の試練を乗り越えて、「私が思い描いたままの姿で、もっと幸福な結末を求める集団的な欲望に潰されることなく、まだ生きている」(295) ことに感嘆する。遺伝子が個人を規定するが如く、「私」の気まぐれに翻弄されつつも、Thassa はその脚本の枠組みに押し込むにはあまりにも Exuberant にして Resilient だったのである。いやそれどころか、逆に自分の方が、初めから物語に組み込まれていたのではないかと、「機械仕掛けの神」^{デウス・エクス・マキナ}としての「私」は、皮肉にも次のように告白する。「初めから結末がこうなることを知っていた。私が彼女の後を追ひ、次なる新しい場所に導かれることを」(295)。「私」のメタフィクショナルなデザインとは裏腹に、「私」が彼女に追従するというこの逆転の構図は、まさに「真実が物語のデザインを笑っている」(273) ことを示している。

その予感通り「私」は、物語内世界において自らがその遺伝子を創造した「幸福の娘」の微笑に導かれ、彼女の「わが家」^{chez nous}へと誘われる。そこで歓待された「私」は、「神より出しゃばった判断を下さないように」(294)、物語を司る権威を放棄し、次のように言っただけ。「私たちが今まで何であったかはどうでもよい。これからどうなるかもわからない。では私たちはどんな物語で終わるのか？ 結論を出すのは死んでからの話」(295-6)。明らかにこの言葉には、「私」がこのアルジェリア娘から感じ取った次のメッセージと限りなく共振する。「まずは生きるのです。判断は後回し。このうえなく疑わしく思えるジャンルを愛しなさい。好判断をしてもどうってことはない。まして命が助かることなどない。流れよ、言葉。物語は一つしかなく、

そこには無数の分身^{ダブル}が取り憑いている。物語がどれだけお気に召すか、判断するのは死んだ後の話」(70)。

かくしてメタフィクショナルなデザインが解消され、取り憑いていた分身^{ダブル}から解放された Thassa と「私」が、メタフィクショナルな次元を超えて、互いに呼び交わすとき、「歓びが私から溢れ出す」(296)。まさに「幸福は美德の報酬ではない。幸福が美德なのだ」(295)という言説を実践するかのよう^{ダブル}に、「私」は彼女とともに今の幸せを噛みしめ、「調子はどう？」と問いかける彼に、Thassa もまた、「ありとあらゆる寛大^{ジェネラス}な言葉で応答する」(296)。そして、黄昏のアトラス山脈に見守られるようにして、彼らのささやかな「共有された歓び」(296)が、「山のあなたの空遠く」ではなく、山のこなたの空近くに溢れ出すところでこの小説はクライマックスを迎え、「わが家^{chez nous}」への帰郷が実現する。

だが、このように一見、アルジェリア礼賛、Generosity 礼賛で終わるのかのようなこの結末を、予定調和的なハッピー・エンディングと解釈することは、まさに Thassa と「私」が忌避する死後の「判断」を先取りし、「神より出しゃばった判断を下す」ことに他ならない。Generosity のテキストには、そのような判断を下すことに読者が躊躇いを覚えるよう、周到な仕掛けが随所に埋め込まれている。一言でいえばそれは、地球という惑星における進化の歴史をすべて射程に入れる、途方もなく巨視的な視点である。無機物から有機体を経て、人類の誕生、ポスト・ヒューマンの出現までをも見通したマクロ的な視座と言ってもよいだろう。あるいはまたそれを、ひたすら特異点^{シンギュラリティ}に突き進むようにみえる惑星をめぐる不可知のデザインと、クライマックスに向かって突き進む Thassa の物語のデザインのアナロジーとして捉えることも可能だろう。いづれにしても、これまで Thassa が愛着をもってしばしば口にしてきた「わが家^{chez nous}」は、彼女の故郷、アルジェリアを指示するのみならず、かくも豊饒にして多様な生成の時空相をなす「我らが惑星」の謂いでもある。あつたのである。

「書くことは常に書き直すこと」

結末の場面において、Thassa と「私」が視線を投げかけるアトラス山脈が、語源を遡れば、両腕と頭で天の蒼穹を支えるギリシャ神話の巨人アトラスの石化した姿であってみれば、「わが家」^{chez nous} は、万物の生まれ故郷にして回帰の場でもある、地球というマトリクスの別名であることが窺える。さらに言えば、Russell の姓が「石」^{ストーン}であり、Thassa がアラビア語で石を意味する“Hajarī”という姓で彼を呼んだことを考えると、人事不省に陥った彼女が「Hajarī、お願いだから一緒に来て」（290）と目で訴えかけたことは、彼が単なる不器用な救援者ではなく、本当は彼女が「魂の生まれ故郷」、^{chez nous}「わが家」に連れて帰るのに相応しい存在であったことを仄めかしている。彼は Thassa の真価を推し量る試金石^{タッチ・ストーン}でもあったのである。だが、そのような眼差しを投げかけられた“Hajarī”は、彼女を救護に来たヘリコプターが、明滅する光となって闇に消えるのを見て、あたかも「われわれの後を継ぐ恐ろしい種の瞬き」（290）のように思う。逃避行の間、「人類に絶滅の危機が忍び寄る可能性」（277）について彼女と語り合った“Hajarī”は、窮地に追い込まれた無力な彼女の中に「進化の究極のトリック」（277）を見出すと同時に、「もしかすると愛さえも、想像を絶する新しい営みへと突き進む巨大なネットワークにおいて卑小な結節点に過ぎないのかもしれない」（278）と、訝る。

このように Russell Stone は、Thassa と一緒に“Hajarī”として「わが家」^{chez nous}に帰郷することも叶わず、想像もつかない進化の行く末をめぐる不安の痕跡をテキストにとどめて姿を消してしまう。その一方で、確信をもって「人類が進化の後継者によってアップグレードされると予言し」（272）、その推進力となってきた Kurton もまた、時代の先端を一步進み過ぎたことにより、テキストから退場を余儀なくされる。彼は、ゲノムの特許をめぐる裁判で敗訴したことが原因でトゥルーサイト社を追われ、「良き超人主義者がいかに穏やかな死を迎えられるかを示すこと」（272）こそが、彼に専ら課せられた

課題となったのである。Thassa に対する交錯した眼差しとも相まって、Russell と Kurton はこのようにポスト・ヒューマンに関して鮮やかな対照をなしてきたわけだが、彼らの退場により、読者は、この惑星における人類の営みをめぐるさらなる思索へと誘われることになる。

金森修が『遺伝子改造』（2005 年）において論じているように、人類が「技術衝迫の遺伝子」を持っていること、つまり「人間が根元的に技術的存在であり、その技術衝迫が自分のゲノムさえ特別扱いしない」(71) ならば、人類が住まうこの地球「わが家」^{chez nous}は、決して所与のものとしての自然が保持されるエデン的無垢の永遠の棲家では有り得ない。Kurton のプロジェクトが仮に頓挫しようとも、彼が先鞭を付けた遺伝子操作技術はいずれまた誰かによって追求されることは火を見るよりも明らかであろう。そしてまた、現に Thassa の卵子から生まれた子供たちが存在するという事実は、「わが家」^{chez nous}に住まう人類の「設計的な本能が、自分の遺伝資源を対象に」（金森 103）拡張し続けることを暗示している。

Ted Peters が “Genes, Theology, and Social Ethics: Are We Playing God?” で論じたように、神の創造は決して終わったわけではなくまだ続いており、「創造された共・創造者」“created co-creator” としての人間の創造性は、神の創造性とリンクするという考え方がもし成り立つなら、「いま存在するすべてのものは、〈決定稿〉ではなく、いわば仕上げ段階の過渡的な存在であるにすぎない」（金森 98）ということになる。まさにこの点において、「書くことは常に書き直すこと」（34, 295）という、Russell と「私」が *Generosity* において好んで口にするメタフィクショナルな言説が、ゲノムの編集との関係において神学的意味を帯びてくる。Thassa は、「わが家」^{chez nous}におけるそうした創造行為としての遺伝子の「書く」と「書き直し」の狭間に生息するメタフィクショナルな「亡霊」^{アバリッション}（294）として立ち現われたと言っても過言ではない。完璧な「幸福」の向こう側に突き抜けるのではなく、不完全な「幸福」のこちら側に滞留する喜び。そのような意味において、アトラス山脈を背景に、「幸福の追求」というオブセッションから解き放たれたこの亡霊は、

まさに人類の岐路を占う試金石として、Exuberance と Resilience を惜しげもなく包摂する詩神だったのである。

*本稿は、科研基盤研究 (C)「アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と『幸福の追求』の未来学」(研究代表者: 渡辺克昭)による研究成果の一端として、平成 26 年度日本アメリカ文学会中・四国支部冬季大会シンポジウム(於: 広島県立大学、2014 年 12 月 13 日)「アメリカ文学における幸せの追求」において、講師として発表した原稿に加筆したものである。

注

- 1 例えば、Thomas Kurton がマントラのごとく信奉し、携行する手帳に書かれた言葉を Tonia Schiff が読み上げる映像シーンは、次のように Teilhard de Chardin への言及が見られる。“Our duty, as men and women, is to proceed as if limits to our ability did not exist. We are collaborators in creation. Teilhard de Chardin” (*Generosity* 24). また、Thassa との関係においても Kurton は、次のように “Mr. Omega Point” という呼称で指示され、Teilhard de Chardin への傾倒ぶりが暗示されている。“The Kabyle had found something about how best to be alive. Mr. Omega Point could find the same, by meeting her” (*Generosity* 135).
- 2 この点については、拙論「時の砂漠－惑星思考の『ポイント・オメガ』」、『異相の時空間－アメリカ文学とユートピア』(英宝社、2011 年)を参照されたい。DeLillo は *Point Omega* (2010) において、Teilhard の唱えたオメガ・ポイントに言及しつつ、主人公 Elster に次のように語らせている。“We’re a crowd, a swarm. We think in groups, travel in armies. Armies carry the gene for self-destruction. One bomb is never enough. The blur of technology, this is where the oracles plot their wars. Because now comes the introversion. Father Teilhard knew this, the omega point. A leap out of our biology. Ask yourself this question. Do we have to be human forever? Consciousness is exhausted. Back now to inorganic matter. This is what we want. We want to be stones in a field” (*Point Omega* 52-3; イタリアックは筆者)。ここで、Elster が「自己破壊の遺伝子」及び、「石」への回帰について言及していることは、本稿で論じた Powers の *Generosity* のテーマとの連関においても注目に値する。
- 3 2009 年に発表された Alexandra Alter とのインタビューによれば、Powers は 2 年前に自分自身のゲノム配列に関する調査を依頼し、遺伝的に自分がいかなる病気

に罹るリスクが高いか、正確に把握していると表明している。Powers は、personal genomics の第一人者にして世界的権威である Harvard Medical School の George Church 教授の研究室を訪れ、そのときに得た知見が *Generosity* の執筆にも活かされているという。

- 4 「私」は、ラテン語の *gens* の系譜を次のように詳細に辿り、それらがいかに広範な領域を網羅し、かつまた多様な生成力を秘めているか、驚異の念を抱きつつ記述している。“I need a *genealogy* for the word. It comes through the loins of that giant Latin *gens*, the one that so liberally shares its family name, family property, family ties, and family plot. The original root of the thing has spread its genes into an absurd number of offspring : genial, genital, genre, gentle, general, generic, germane, germinate, engine, generate, ginger, genius, jaunty, gendarme, genocide, and indigenous, while scattering cousins as far afield as cognate, connate, nascent, native, nation, children, kind. Generous to a fault. Too many progeny for any paternity test” (*Generosity* 79).

引用・参考文献

- Agamben, Giorgio. *Homo Sacer : Sovereign Power and Bare Life*. Trans. Daniel Heller-Roazen. Stanford : Stanford UP, 1998. Print.
- Alter, Alexandra. “A Dip in the Gene Pool : Richard Powers on His New Novel *Generosity* and His Own Genetic Code.” *The Wall Street Journal*. The Wall Street Journal, 9 Oct. 2009. Web. 19 Dec. 2014.
- Buchanan, Allen. *Beyond Humanity? : The Ethics of Biomedical Enhancement*. Oxford : Oxford UP, 2011. Print.
- DeLillo, Don. *Point Omega*. New York : Scribner, 2010. Print.
- Dewey, Joseph. *Understanding Richard Powers*. Columbia : U of South Carolina P, 2002. Print.
- Kass, Leon R. *Beyond Therapy : Biotechnology and the Pursuit of Happiness : A Report by The President’s Council on Bioethics*. New York : Harper Perennial, 2003. Print.
- Kincaid, Paul. “*Generosity* by Richard Powers.” *Strange Horizons Reviews*. Strange Horizons, 22 Nov. 2010. Web. 13 Nov. 2014.
- Kurzweil, Ray. *The Singularity is Near : When Humans Transcend Biology*. New York : Penguin Books, 2005. Print.
- Lake, Christina Bieber. *Prophets of the Posthuman*. Notre Dame : U of Notre Dame P, 2013. Print.

- Peters, Ted. "Genes, Theology, and Social Ethics : Are We Playing God?" Ed. Ted Peters. *Genetics : Issues of Social Ethics*. Cleveland : The Pilgrim Press, 1998. 1–45. Print.
- . *Playing God? : Genetic Determinism and Human Freedom*. New York : Routledge, 2002. Print.
- Powers, Richards. *Generosity : An Enhancement*. New York : Farrar, Straus and Giroux, 2009. Print.
- . *Three Farmers on Their Way to a Dance*. New York : HarperPerennial, 2001. Print.
- Sandel, Michael J. *The Case against Perfection : Ethics in the Age of Genetic Engineering*. Cambridge : Harvard UP, 2007. Print.
- White, Patty. "The Rhetoric of the Genetic Post Card : Writing and Reading in *The Gold Bug Variations*." *Intersections : Essays on Richard Powers*. Eds. Stephen J. Burn and Peter Eempsey. Champaign and London : Dalkey Archive Press, 2008. Print.
- Wood, James. "Brain Drain : The Scientific Fictions of Richard Powers." *The New Yorker*. The New Yorker, 5 Oct. 2009. Web. 1 Oct. 2014.

上田昌文・渡部麻衣子編『エンハンスメント論争－身体・精神の増強と先端科学技術』社会評論社、2008年。

金森 修『遺伝子改造』勁草書房、2005年。

渡辺克昭「時の砂漠－惑星思考の『ポイント・オメガ』」、『異相の時空間－アメリカ文学とユートピア』英宝社、2011年、310–333頁。